江戸時代の吉祥院「番匠観音」信仰の一端

――瑞松庵蔵『(仮題)番匠観音利生記』の翻刻をかねて――

小野美典

山口県宇部市大字船木に在る曹洞宗の古刹「瑞松庵」には、一体の聖観世音菩薩立像が安置されている。同市の有形文化財でもあり、地元では「番匠観音」と呼ばれている仏像である。

この番匠観音像は、室町時代の一時期、船木に在った「吉祥院」という寺院に安置されていた。この吉祥院は、連歌師宗祇の閲歴を考えるうえで重要な寺院であり、宗祇研究史上、注目されてきた寺院である〔注1〕。

そして、この番匠観音像には、三種類の縁起が付随して瑞松庵に伝来している。それらの発見のいきさつ、並びに翻刻・紹介は、旧稿〔注2〕を参照されたい。

更に、瑞松庵にはもう一種類、番匠観音に関する文書が伝わっている。恐らくは、三種類の縁起とともに各地を転々として来たものと思われるが、名前も不明の文書である。他の三種類の縁起とほぼ同質と思われる楮紙系の和紙を繋いだものに書かれており、未表装。文書の後半部には手形なども記載されており、番匠観音に関する雑多な資料を書き記したものと思われる。そのうち、前半部に記されたものは、番匠観音の利生記、或いは奉加帳とも呼び得る内容のものであるが、そこに登場する人物名(固有名詞)は、歴史上にその存在を確認できる人物が多い。この資料が、単なる口碑・伝承の類いではなく、事実を網羅した可能性をも窺わせる内容となっている。江戸時代の番匠観音信仰の広がりを窺わせる資料として、また、観音霊験譚の形成を考える上でも貴重な資料と思われるので、ここに翻刻し、語釈並びに考察を加えることとする。

なお、この資料には表題がないので、今回、便宜的に『(仮題)番匠観音利生記』として翻刻・紹介することとした。「利生記」としてはやや異質な内容も含まれるが、便宜上の名称である。以下の論考で「本資料」と呼んだ場合は、この『番匠観音利生記』を指すものとする。

・　・

《『(仮題)番匠観音利生記』の翻刻》

一元禄六之年和泉国唐金屋船
貳十八人乗北国ニテ難風ニ相帆柱
吹折ラレ存命不定之處ニ其内壹人
船木番匠観音之利生聞及立願

船中一同ニ観音ヲ念シ候故風波ノ
難ヲ凌下関着船之節則剋船中
貳十八人トモニ一同ニ参詣燈明銭
トシテ銀拾両差上候事

一大嶋伊勢守殿御通之節御家老衆
與力衆観音参詣海陸安全之
簡守受申サレ候事

一細川越中守殿御通之節御家来衆
仲光半助ト申仁参詣簡守受申
サレ越中守エモ次手ヲ以差上ケ申度
由ニテ外ニ簡守壹枚受申サレ
越中守殿ヨリ拝領之伽羅トシテ壹包
指上ラレ候事

一長崎勘定方役人衆船木一宿之節観音
参詣簡守受申サレ金子差上ラレ候事

一長崎大通事江川藤左衛門ト申仁船木
一宿之節観音参詣簡守受申
サレ金子差上ラレ候事

一天草御代官竹村太郎右衛門殿船木御一
宿之節家老壹人與力ト相見へ候仁
壹人観音参詣簡守受申サレ候事

一其外諸国之諸侍中数多年〻
参詣簡守受申サレ候事

右写

以下に、本資料に見られる固有名詞を中心に、語釈・考察を加える。

【和泉国唐金屋】

和泉の国の豪商。『譚海』巻一に、次のように見える。

和泉国にメシ・カラカネと云豪富のもの両人有。数百人を扶助し世にしられたる者也。メシが家には黄金にて造たる膳椀を所持せりとぞ。二階迄荷を付たる馬を牽上るやうに造たる家也。家内を流水の通るやうに溝をほり、食事の時溝の左右に坐して食し、食し終れば膳椀をそのまゝ溝へ投入る、水下にてとりあげてあらひ収る事也とぞ。〔注3〕

古妻嘉蔵氏〔注4〕、並びに前田金五郎氏〔注5〕によると、泉州佐野浦には、「食(めし)」家〔後に「食野(めしの)」家と呼ばれる〕と「唐金(からかね)」家の両家があり、ともに富豪として知られていたが、両家が親戚関係にあったことと、食家の屋号の一つが「唐金屋」(古妻氏によると、他に「大饗屋」「和泉屋」という屋号を持っていたらしい)であったことの二つの理由から、食家(屋号

「唐金屋」と唐金家が混乱した、とのことである〔注6〕。

本資料の「元禄六之年和泉国唐金屋」という記述だけからは、食家（屋号「唐金屋」）か唐金家のことか判然としないが、恐らくは、食家の方ではないかと思われる。古妻氏の論文によると、食家は数多くの寺社に様々な寄進をするのが慣例であったという。そして、古妻氏は、その一端として、次の事例をあげている。

◎三重県飯南郡波瀬村字口窄の泰運寺の観音に、八角の鐘を寄進

◎摂津中山観音に、金燈籠（金五十両の燈明料を添えて）を奉納

◎摂津住吉神社に大石燈籠を奉納

こうした食家の慣習からすれば、本資料に登場して、番匠観音に燈明銭として銀十両を奉納した「和泉国唐金屋」とは、食家のことではないかと推測されるのである。もし食家のことであるとすれば、元禄六年（一六九三）は、本家ならば四代次郎左衛門盛英〔寛永十六年（一六二九）生、元禄十年（一六九七）卒〕、分家ならば二代吉左衛門道壽〔寛永十（一六三三）年生、宝永元年（一七〇四）卒〕の時代ということになる〔注7〕。

なお、井原西鶴の『日本永代蔵』巻一の三「浪風静に神通丸」に、和泉国の豪商「唐金屋」が登場する。

近代泉州に唐かね屋とて、金銀に有徳なる人出来ぬ。世わたる大船をつくりて、其名を神通丸とて、三千七百石つみても足かろく、北国の海を自在に乗て、難波の入湊に八木の商売をして、次第に家栄へけるは、諸事につきて、其身調義のよきゆへぞかし〔注8〕。

この『日本永代蔵』の唐金屋に関しても、食家・唐金家のどちらを指すのか、議論があるようである〔注9〕。

【大嶋伊勢守】

長崎奉行を勤めた大嶋伊勢守義也（雲八）と思われる。

『国史大辞典』の「長崎奉行」〔巻10・五八〇頁〕の項の一覧表では、大嶋伊勢守義也は、元禄十二年（一六九九）六月二十八日補職、同十六年（一七〇三）七月二十八日作事奉行に転じている。

鈴木康子氏の『長崎奉行の研究』〔注10〕によると、元禄十二年（一六九九）に長崎奉行の定員は一人増の四人となり、うち二人が長崎在勤、二人が江戸在勤となった。大嶋伊勢守は、ちょうどこの増員期に長崎奉行となっている。鈴木氏の同書掲載の「長崎御役所留」〔注11〕には、次のような資料が掲載されている。

元禄十二卯年六月晦日、奉行四人被仰付候旨被仰下候御半紙大島雲八林藤五郎儀、一昨廿八日御前江被召出之、其地奉行被仰付候、向後四人ニ而可相勤旨被仰出候、勤方之儀は、委細両人江申渡候、此趣為心得別紙書付遣候、以上

六月晦日《以下略》

従って、本資料の「大嶋伊勢守」が、長崎奉行を勤めた大嶋伊勢守義也（雲八）のことであるとすれば、本資料の出来事は、その在任中の元禄十二年（一六九九）六月から同十六年（一七〇三）七月の間の出来事であろうと推測される。

【簡守】

「ふだまもり（札守）」のことと思われる。節用集には、「簡」の字に「フダ」と付訓するものは多い〔注12〕。『日本国語大辞典（第

二版』は、「ふだまもり【札守】」の説明を、「神仏の霊がこもり、その加護によって災難を逃れることができるという札。守り札。お守り《用例省略》」〔注13〕とする。

縁起〔注14〕の中には、次のように記されている。

①『福聚山吉祥寺縁起』

観音ト現シ玉フ因縁者道昭禅師皈朝／在テ今之祝融山三周庵居時夢中ニ／道昭ニ示現シタマイ吾者是往昔番匠／之像也今ヨリ番匠正観音ト現シ海陸／守護スヘシ簡守道昭師ヱ御相伝至今／福聚山第一霊宝也

②『番匠観音縁起』

道昭曾図於影像刻板以／垂将来矣乃是為令護海上之難也自中古／以降貢船商舶値猛風及于漂巨海祈於／番匠大士以免没溺之愁保十死之命者／非一非二非十非百大悲霊験不遑記之者也／

③『観世音略縁起』

道昭禅師に夢に／託して曰我は是観自在／菩薩なり我を信せん／もの巨海の難を鎮護し／没溺の愁ひを免からしめ／福寿保寿を祈らんと／誓ひを告たまふ是によて／道昭禅師稀有の／おもひをなし一宇を／草創し安置し奉り／長門国三十三所の／一ヶ所と信奉る影像を／画しあまねく諸人に附／与せしに此尊像を信する者／十死一生の難をまぬかるゝ／人かそふるに暇あらず／一念称名の功力によつてハ／火も焼る事能す水も／溺す事ならんや三途／八難のくるしみだに聲に／随ひて抜きたまふ況や／信心の行者をや

番匠観音は、神功皇后の三韓征伐に際して、造船を助けた化神を刻んで像となしたものとの伝承がある。それは三種類の縁起全ての前半部分（ここには未掲載）で書かれているが、それを受けて、右の①②③の記事が続く。①に依ると、「道昭〔注15〕が祝融山〔瑞松庵背後の山。瑞松庵の山号でもある〕の三周庵に居た時、夢に番匠観音が現れ、海陸守護の『簡守』を道昭に与えた」ということになる。②・③はそれとはやや異なり、番匠観音像を絵に画き（版画）、札守としたというのである。なお、②の傍線部は、本資料の「唐金屋」の記事を想起させて興味深い。

【細川越中守】

細川氏で越中守に叙せられた人物は、豊前中津・小倉藩主細川忠興（一五六三～一六四五）、その三男で小倉藩主・初代熊本藩主となった細川忠利（一五八六～一六四一）、三代熊本藩主細川綱利（一六四三～一七一四）以降の歴代熊本藩主である〔注16〕。

ここは、後掲の仲光半助の事跡から考えて、細川忠利以降の熊本藩主の誰かであろう。

【仲光半助】

細川家家臣。仲光半助に関しては、徳岡涼氏と小川剛生による紹介がある〔注17〕。それによると、仲光家は清和源氏の流れで、代々「半助」を通称とした。初代半助が正昭（当初は正綱）〔元和五年（一六一九）～延宝七年（一六七九）〕で、寛永九年（一六三二）に御小姓として細川忠利に出仕。爾来、文武両道の士として忠利に仕え、寛永十四年（一六三七）から翌年にかけての島原の乱にも軍功をあげている。また、烏丸光広・冷泉為景・烏丸資慶らから歌道も学んでお

り、仲光家には多くの歌書類が伝わっている。初代正昭以降、正辰—正有—正古—正右—正喜—正意—正富—永勝—正時と続いた。

本資料に登場する仲光半助が何代の半助かは不明である。

なお、森鴎外が『阿部一族』の中で、討手として阿部屋敷の表門に向かうこととなった竹内数馬を紹介するにあたって、島原の乱での事績を記し、「柳川の立花飛騨守宗茂は七十二歳の古武者で、此時の働振を見てゐたが、渡辺新弥、仲光内膳と数馬との三人が天晴であつたと云つて、三人へ連盟の感状を遣つた」〔注18〕と記しているが、ここで紹介されている仲光内膳というのが、初代仲光半助(正昭)のことである。『阿部一族』の原拠資料となった『阿部茶事談』では「竹内数馬ニ立花飛騨守給リし感状ハ、数馬・渡辺新弥・仲光小内膳三人連名也」〔注19〕と記されている。

【越中守殿ヨリ拝領之伽羅】

小川氏によると、「仲光家には、興津弥五右衛門が主君細川忠興の命を受けて長崎で買い付けてきたという名香初音の一片(のち勅命により白菊と改称する)が大切に保存されているのである」〔注20〕という。本資料の記事が事実とすれば、この伽羅の一片を番匠観音に寄進した可能性が考えられる。

ここで注目したいのは、『阿部茶事談』に記された、討ち入り前夜の数馬の行動である。

すでに廿日の夜に成りけれハ、沐浴して身を改め、月代を剃立、髻を梳けるが、白菊といふ名香を拝領して持けるを、あく迄とめ木にそしたりける〔七五一頁〕。

数馬も御児小姓故、此白菊の香拝領して所持せしを、討死の時留木ニせしと也〔七五四頁〕。

数馬が主君の忠利から名香白菊を拝領したというのは事実であろう〔注21〕。しかも、「御児小姓故」と書かれている。本資料に登場する仲光半助も、数馬と同じく忠利の御小姓であった。想像をたくましくすれば、前項で触れた島原の乱での感状と関係して拝領したのかもしれない。いずれにせよ、初代仲光半助が越中守忠利から香木(後述のように「伽羅」)を拝領していた可能性は非常に高い。本資料に登場する越中守並びに仲光半助が、それぞれ何代に該当するのかは即断できないが、以上の考察から、越中守細川忠利から初代仲光半助が伽羅を拝領し、それを番匠観音に奉納したのではないかとも思われる。

なお、興津彌五右衛門が長崎で香木を買い付けた話は、森鴎外の『興津弥五右衛門の遺書』の題材となっている。鴎外自身、そのあとがきで、香木渡来の年次推定に慎重を期した旨を記している〔注22〕が、細川家の『綿考輯録』には、次のように記されている。これは、解題によると『大日本近世史料細川家史料』には未所載のものである。

一去々年、交趾江渡船せしもの帰国、伽羅持参いたし候、三斎君白菊と御名付、其箱の蓋に御自筆書付

寛永元年交趾江渡船同三年ニ来伽羅白菊と名之

たくひありと／誰かは／いはん／すゑにほふ／秋より後の／しら菊の花

箱長八寸四歩、横七寸六歩、高八寸、板厚サ三歩半、桐之木地ふたハさんふたなり、伽羅木指渡五寸余、長サ八寸余、外ニ三四寸之木懸目三百目余有之、添居申候由なり〔注23〕

細川忠興(三斎)が寛永三年(一六二六)に買い付けさせた伽羅が、忠興自身によって白菊と命名され、それを次代の忠利が初代仲光半助に下賜し、何代目かの仲光半助が番匠観音に奉納した、というになろう。

【長崎大通事江川藤左衛門】

江戸時代、通弁・翻訳を担当していたのは唐通事(中国語担当)・阿蘭陀通詞(オランダ語担当)と呼ばれる通訳担当者たちであった。唐通事の組織では、大通事(四人)、小通事(四人)、稽古通事(若干名)が基本定数で、上に目付二人、さらに風説定役一人が置かれた。享保期以降は、各階層が輔任され、人員が増加した〔注24〕。

唐通事並びに関係諸役人の系譜を集成編集した『譯司統譜』〔注25〕には、「江川藤左衛門」なる人物は見いだせない。しかし、唐通事が世襲制で、潁川(えがわ)・林・彭城(さかき)を姓とする少数家の寡占状態であったこと〔注26〕からすると、ここは、「潁川藤左衛門」を「江川藤左衛門」と書き誤ったと思われる。

宮田安氏の『唐通事家系論攷』〔注27〕によると、潁川氏は、唐姓の「陳」を日本姓に変えて潁川としたもので、「陳冲一」を開祖とする唐通事の名門であったという。

宮田氏の同書によると、潁川藤左衛門と名乗った人物で、大通事を務めた者は、以下の五人である。なお、〔　〕内には生没年を西暦で記した。

①初代潁川藤左衛門〔?～一六七六〕―寛永十八年(一六四一)六月～延宝二年(一六七四)二月、大通事在任

②二代潁川藤左衛門〔?～一六九七〕―延宝三年(一六七五)六月～元禄八年(一六九五)十一月、大通事在任

③五代潁川藤左衛門〔一七二〇～一七八七〕―天明二年(一七八二)七月～天明七年(一七八七)五月死去まで大通事在任

④六代潁川藤左衛門〔一七六〇～一八二五〕―文政三年(一八二〇)五月～文政八年(一八二五)十二月死去まで大通事在任

⑤八代潁川藤左衛門〔?～一八五九〕―安政五年(一八五八)三月～安政六年(一八五九)八月死去まで大通事在任

本資料に見られる「長崎大通事江川藤左衛門」は、この五名の中の誰かであろうと思われる。

【天草御代官竹村太郎衛門】

『熊本県史　近代編第一』〔注28〕、並びに『熊本県史　別巻第一年表』〔注29〕に依ると、「竹村太郎衛門(嘉茂)」は、宝永元年(一七〇四)九月二十五日に天草代官として着任し、正徳四年(一七一四)六月まで務めている。なお、『天草島鏡』〔注30〕には、「寛永元年甲申」の条に「御代官竹村太郎右衛門」の記事があり、「同年九月廿九日富岡御着正徳三年迄以上十ヶ年」と見え、竹村太郎衛門が代官所のある富岡に着いたのは、九月二十九日のこととする。

『天草島鏡』、ならびに『天草近代年譜』〔注31〕によると、代官竹村太郎右衛門は、着任した冬に重病を患い、長崎や熊本から医師を呼び寄せる大事となっている。郡中の村役が相談して、伊勢神宮に病気平癒の立願をして快癒。翌年三月には、大庄屋吉田八右衛門ほか三名がお礼参り(代参)をし、同六月には、無事代参を遂げた四名を、代官竹村が饗応して労をねぎらっている。こうした史実から考えて、代官竹村が船木に投宿した時、家老と与力らしき者が番匠

観音に参詣し、簡守をいただいたことは、十分に考えられることであろう。

以上、固有名詞を中心に語釈・考察を加えた。

本資料に見られる人物名(固有名詞)は、歴史上実在するものばかりである。しかもその多くは、本資料の記述と矛盾しない歴史上の事績を持っている。食家の寺社寄進、仲光半助の越中の守からの伽羅拝領の件、竹村太郎右衛門の病弱ゆえの神仏祈願…。それらは、本資料が、荒唐無稽な空想、あるいは完全な創作によるものではないことを説明している。近世の寺社縁起や利生譚の生成を考える上で、貴重な資料となりうるといえよう。

注

＊『国史大辞典』は、国史大辞典編集委員会『国史大辞典　第一巻～第十四巻』(吉川弘文館、昭和54年3月～平成5年4月)を指し、引用にあたっては、巻・項目・頁のみを記すことにした。

1—拙稿A「『筑紫道記』の長門国船木「吉祥院」について」(日本大学国文学会『語文　第百二十九輯』平成19年12月)において、吉祥院が日明貿易に関係する寺院であった可能性を述べ、吉祥院の沿革史を可能な限り明らかにした。

2—拙稿B「瑞松庵蔵『福聚山吉祥寺縁起』『番匠観音縁起』『観世音略縁起』の翻刻と紹介—『筑紫道記』長門国船木記事の吉祥院—」(日本大学国文学会『語文　第百二十三輯』平成17年12月)。

拙稿C「(続)中世山口の文芸の跡—長門国船木の「吉祥院」—」(山口大学人文学部同窓会報『鴻文　第25号』鴻文会発行、平成18年1月)

3—原田伴彦ほか編『日本庶民生活史料集成　第八巻　見聞記』(三一書房、昭和44年11月、二六頁)。ただし、常用漢字体に改めて引用。

4—古妻嘉蔵「和泉長者食家譚」(『食野家関係資料　第一集』佐野史談会、昭和25年11月)。

5—前田金五郎「『唐金』小考」(注4の『食野家関係資料　第一集』)。

6—『摂陽奇観』の巻十七の寛文年間の条に、「和泉佐野といへる船着に名高き船持唐金屋与茂三《世上に食と異名ス》といふ豪家あり—中略—また一説には大津丸は唐金屋助九郎とて食の別れの家に持し船也共いへどもやハり本家の持船に相違なし」(『浪速叢書　第二』浪速叢書刊行会、昭和2年5月、五六頁、なお《　》内は原文割り注)とあり、割り注に見られるように、既に江戸時代において混乱していたようである。

7—池田谷久吉「食家系譜」(注4の『食野家関係資料　第一集』)。

8—麻生磯次・冨士昭雄『対訳西鶴全集十二　日本永代蔵』(明治書院、昭和五十年四月、一六頁)。ただし、常用漢字体に改めて引用。なお、引用本文中の「八木の商売」は「米」の字を分解したもので、米商いのこと。

9—『日本歴史地名体系28　大阪府の地名Ⅱ』(平凡社、昭和61年2月、一四七八頁)には、「井原西鶴の『日本永代蔵』に北国

にまで航海する神通丸の船主であった泉州唐金屋がみえるが、これは佐野浦の食野家のことで、同じく同浦豪商の唐金家と混同したものではないかともいわれている」とする。泉佐野市史編さん委員会編『新修　泉佐野市史6　史料編近世Ⅰ』〔清文堂、平成17年3月〕の「Ⅰ　豪商食野家」の解説〔岩城卓二・永堅啓子執筆〕では、「文芸作品でしばしば取り上げられる唐金家と、本家とされる次郎左衛門家〔小野注―食野家〕との関係等、一族については不明な点が多い」〔一三六頁〕とする。なお、野間光辰『(日本古典文学大系48)西鶴集　下』〔岩波書店、昭和35年8月〕の補注「神通丸」〔四六三頁〕にも考察がある。

10―鈴木康子『長崎奉行の研究』〔思文閣出版、平成19年3月、二六頁～八五頁〕の「第一章　貞享～元禄期長崎奉行制度の変化」並びに「第二章　近世中期長崎支配機構について」。

11―注10の『長崎奉行の研究』四九頁。

12―たとえば、『天理図書館善本叢書(和書之部)第五十九巻』〔八木書店、昭和58年1月〕所収の『増刊下学集』〔一二七頁〕や『節用集天正十七年本』〔四〇三頁〕など。

13―『日本国語大辞典(第二版)　11巻』〔小学館、平成13年11月、八九八頁〕

14―注2の拙稿B。

15―飛鳥時代に入唐して、日本に法相宗を伝えた道昭か。佐久間竜『日本古代僧伝の研究』〔吉川弘文館、昭和58年4月、四八～七六頁〕によると、道昭は、斉明天皇七年(六六一)に帰国し、元興寺東南隅に禅院を建てて宗教活動を始め、やがて民間を周遊するようになった、という。道昭の民間周遊の伝承や造橋伝説(佐久間によると、宇治橋やその他の重要な橋梁架設にも、道昭が関係した可能性があるという)をもとに、この縁起に登場させたものか。なお道昭が、『続日本紀』で「後に天下を周り遊びて、路の傍に井を穿ち、諸の津済の処に、船を儲け橋を造りぬ。乃ち山背国宇治橋は、和尚の創造りしものなり。和尚周り遊ぶこと凡そ十有餘載」〔青木和夫ほか『(新日本古典文学大系12)続日本紀　一』岩波書店、平成元年3月、二五頁〕と記載され、その出自が「河内国丹比郡の人なり。俗姓は船連」〔同書、二三頁〕として、船氏の出であるのは、興味深い。縁起作成者は、これらの道昭伝説を踏まえて、造船の化神である番匠観音が夢の中に現れるのにふさわしい人物として、道昭を選んだのであろう。

16―『三百藩藩主人名事典第　四巻』〔新人物往来社、昭和61年6月、「小倉藩」〔三三四～三三四頁〕、「熊本藩」〔五〇九～五一六頁〕による。

17―徳岡涼「三宅家蔵仲光家旧蔵『新続古今和歌集』について」〔新熊本市史編纂委員会編『市史研究くまもと　第十四号』熊本市発行、平成15年3月〕
小川剛生「三宅家蔵仲光家文書の典籍類について」〔『国文学研究資料館報　第61号』国文学研究資料館、平成15年9月〕

18―『森鴎外全集3(筑摩全集類聚)』〔筑摩書房、昭和46年6月、一二八頁〕。

19―藤本千鶴子「校本『阿部茶事談』」〔『真下三郎先生退官記念論文集　近世・近代のことばと文学』第一学習社、昭和47年12月、

七五〇頁〕。ただし、藤本氏が底本とした熊本県立図書館本はやや文意が不明瞭なので、校異として記された永青文庫本などによって改めた。なお、以下『阿部茶事談』の引用はこの藤本論文に依る。

20—注17の小川剛生論文。なお、森鴎外の『興津弥五右衛門の遺書』は、その原拠資料である『翁草』によって、細川忠興が「初音」と命名し、後に後水尾天皇によって「白菊」と改名されたとするが、『阿部茶事談』や後述の『綿考輯録』によると、「初音」と「白菊」の命名関係は複雑である。

21—森鴎外の『阿部一族』にも数馬と名香のことは記される。しかし、香の名を「初音」にしている。

22—奥津が長崎に往つたのは、いつだか分からない。併し初音の香を二条行幸の時、後水尾天皇に上つたと云つてあるから、其行幸のあつた寛永三年より前でなくてはならない。然るに奥津は香木を隅本〔小野注—熊本〕へ持つて帰つたと云つてある。細川忠利が隅本城主になつたのは寛永九年だから、これも年代が相違してゐる。そこで丁度二条行幸の前寛永元年五月安南国から香木が渡つた事があるので、それを使つて、隅本を杵築に改めた〔注18所収の『興津弥五右衛門の遺書』(初稿)のあとがき、一一〇頁〕。

23—『綿考輯録　第三巻　忠興公(下)』〔出水神社発行、平成元年3月、一二七頁〕。

24—以上は、『国史大辞典』の「通事」(巻9・七〇三頁)、「唐通事」(巻10・一七七頁)に依る。なお、『長崎県大百科事典』〔長崎新聞社、昭和59年8月〕の「唐通事」の項(宮田安執筆)には、「大通事(おおつうじ)」とルビが付されている。

25—『長崎県史　史料編第四』〔長崎県編集発行、昭和40年3月、五八九～七六六頁〕。

26—林陸朗『長崎唐通事—大通事林道栄とその周辺—』〔吉川弘文館、平成11年6月、一～九頁〕。

27—宮田安『唐通事家系論攷』〔長崎文献社、昭和54年12月、二二頁～八五頁〕。

28—『熊本県史　近代編第一』〔熊本県編集発行、昭和36年3月、一三一頁〕の「天草五箇庄支配関係一覧」

29—『熊本県史　別巻第一　年表』〔熊本県編集発行、昭和40年9月、一八〇～一八三頁〕

30—『天草の歴史』〔本渡市教育委員会編集発行、昭和37年3月、一六一頁～一六三頁〕によると、『天草島鏡』は、著者上田源太夫宜珍が二十余年をかけて文政六年(一八二三)に完成させたものという。なお、『天草島鏡』本文は、『天草郡史料　第壹輯』〔天草郡教育会編纂、大正2～3年刊行の復刻版(昭和47年9月)〕による。

31—松田唯雄『天草近代年譜』〔みくに社、昭和22年3月、一〇五～一〇六頁〕。

〔付記〕貴重な資料の閲覧並びに写真撮影をご許可下さり、色々とご教示下さった曹洞宗祝融山瑞松庵住職藤村弘隆氏に、衷心よりお礼申し上げる。

(おの・よしのり)